

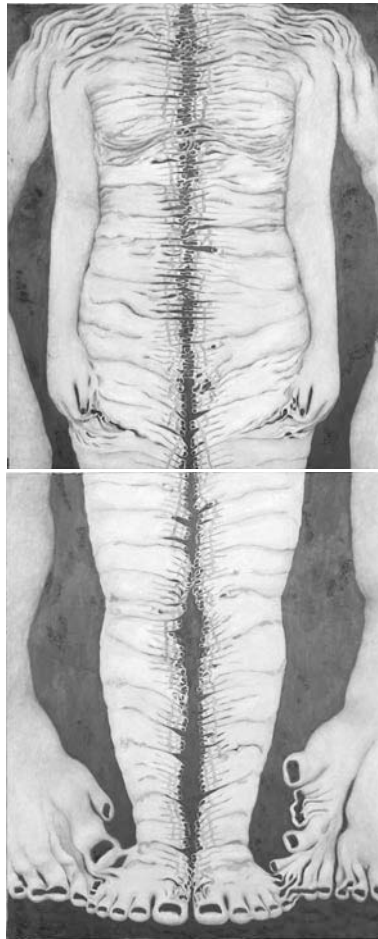
堀川このみ 《遺伝》 キャンバス、油絵具 3240 × 1300 mm

《遺伝》  
身体的モチーフを用いた表現と  
マチエールによる効果の追求  
《Heredity》

A Study on the Expression of the Bodily Motif and the Pursuit of the Effect of Matière

堀川 このみ  
Konomi HORIKAWA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻  
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University



《遺伝》  
キャンバス、油絵具 3240 × 1300 mm

本稿は、修了作品《遺伝》を制作するにあたり、私が遺伝に対して持つイメージと、どのように指という身体的モチーフに結びついたのかを考察し、そのイメージを絵画として表現する際に用いたマチエールについて論述したものである。

私が遺伝について意識を向け、制作を行ったきっかけとして、自分が今現在なぜ存在しているのか考えたところから始まった。人類が始まって以来脈々と続いて来た血の繋がりの中には、気が遠くなる年月があり、そこに膨大な数の人間が存在していた。その末端に自分が存在していること、また必然的に、かつて存在していた膨大な数の人間達の断片、すなわち遺伝子が私の身体中に詰まっているのだと自覚した。その自覚に至ると同時に、遺伝子が詰まった自分は何なのかという疑問が生じた。これらの気付きから「遺伝」について熟考、自分なりの解釈を行い、その思考の過程で生まれたイメージを絵画として表現することを試みた。また、イメージを絵画として表現する際に作品のテーマや、モチーフに沿ったマチエールを意識的に作ることで生まれる効果を追求した。

本稿は5つの項目で構成されており、各項目の内容は以下の通りである。

1. テーマ設定のきっかけでは、自分が今現在なぜ存在しているのかを考えそこで気付いたことを述べている。
2. 「遺伝」について考えた過程で生まれたイメージでは、前述で述べた気付きから「遺伝」について熟考しその過程で生まれたイメージを明らかにしている。
3. これまでの制作については、過去の作品で扱ってきたテーマやモチーフ、表現方法の変遷について振り返っている。
4. 身体的なモチーフについては、本修了作品で描いた指と人体それぞれに注目し、モチーフとして選択するに至った経緯と、私がそれらに対して持つ考えを述べ、
5. マチエールについては、これまでの絵画制作におけるマチエール作りを振り返るとともに、本修了作品で試みたマチエール作りとそれによる効果について詳述している。最後に本修了作品における表現やマチエールづくりによって得られた成果と今後の展望を述べ本稿を締めくくっている。